

# 象徴資本の秘密/隠蔽における ブルデュー「搾取モデル」の欠陥

小原一馬 (京都大学大学院教育学研究科)

ブルデューの資本概念における「秘密/隠蔽」の重要性はすでに多くの研究者によって、指摘されている(Harker et al. 1990, Calhoun et al. 1993)。ブルデューの資本概念の主要な特徴として、(1) 通常、資本とみなされない、文化資本、社会資本などの象徴資本を、資本としての性格が隠蔽された「資本」だとすること(2) 資本としての性格が隠蔽された象徴資本と、資本としての性格が隠蔽されていない経済資本との対立を、社会構造の基本軸の一つとして認めたこと、の二点があげられる。この双方において、「秘密/隠蔽」は積極的な意義を果たしている。

このような重要性をもった、象徴資本の「隠蔽されている」という性格は、しかし、これまで「誤認」として、「象徴暴力」「象徴権力」といった諸概念とのつながりでのみ理解されてきた。すなわち、上層階級による搾取というマルクス主義的な文脈でのみ理解されてきたのである(ibid.)。ブルデューの「秘密/隠蔽」に関する理論には、そうしたマルクス主義的なモデルのほかに、合理的選択モデルとして分類される、筆者のいう「寡占協調モデル」があるにも関わらずである(拙稿1997)。

本発表では、ブルデュー資本概念における「秘密/隠蔽」の、一般的解釈を形作っていると思われる、こうしたマルクス主義モデルの根本的欠陥を暴く。我々は、このマルクス主義モデルを、「搾取モデル」と呼ぶことにしよう。

こうした、搾取モデルのルーツは、マルクスによる反経済的な場における秘密の分析にある(Marx 1944=1964)。マルクスは、この『経済学・哲学草稿』において、こうした

秘密を支配の脱神秘化との関係で論じている。マルクスによれば、社会構造の変化に伴い、かつての支配階級であった地主階級は、新たに勃興した支配階級である資本家階級にとってかわられる。この変化は階級支配のすべての基礎を、貨幣によってその本質を暴くことにより、脱神秘化する。この代替のプロセスは、新旧支配階級間の対立として始まり、資本家階級の勝利とともに終わる。

これがマルクスによる本来の議論であった。こうしたマルクス主義的観点からの、ブルデューの業績は、「経済資本と象徴資本の相互変換可能性が、資本主義的『合理化』にも関わらず、どの程度依然として存続し、どの程度実際に、さまざまな支配関係を維持する、ほかで置き換えることのできない機能を果たしているかを、検討すること」ということになる(Nice 1980 in Harker et al. 1990=1993: 10)。言い換えるなら、ブルデューは、資本家階級と地主階級の対立が、「公然たる自覚的な俗悪」である経済資本を基礎とする階級と、「隠蔽された、無意識的な俗悪」である文化資本を基礎とする階級との対立として、資本主義社会においても続いており、しかもこうした対立は、この二者間の相互依存を通して、下層階級の支配と搾取に役立てられている、と考えているというのである。

この解釈は、ブルデューの理論の一面を正しく捉えている。ブルデューは確かにこうしたことを語っているし、我々はそのことを否定しない。問題は解釈にではなく、ブルデューの「搾取モデル」そのものにある。

ブルデューの「搾取モデル」は「秘密/隠蔽」による搾取の効果を次のように説明す

る。すなわち、ある「場」において所有資本の少ない者は、「秘密／隠蔽」があるために、元々少ない資本に見合うよりも、さらに低い社会的位置しか得ることができず、またその逆に、所有資本の多い者は、元々多い資本に見合う、それ以上の社会的位置を得ることができるとする。

このモデルの第一の問題点は、ハビトゥスに導かれた行為の戦略的合理性を、下層階級、あるいは力関係の弱いものに、認めないことである。これは『実践感覚』(Bourdieu 1980=1988)の第三章「構造・ハビトゥス・実践」での、ハビトゥスの、「調整された即興」による戦略的合理性の仮定と、矛盾することになる。

これより重大な第二の問題点は、本来、それぞれの「場」における、社会的地位の獲得と表示の効果を基準として、人工的に作り出された「資本」という概念が、社会的地位の獲得と表示を行う以上の実体として扱われていることにある。そう、ブルデューがしばしば批判を行う、「理論の実体化」が、彼自身の理論に起こっているのだ。実体化されない資本概念によれば、上記のような現象は、元々、それぞれの持っていた資本がより少なかった、あるいはより多かったと考えればすむだけのことだ。

あくまで「元々少ない資本に見合うよりも、さらに低い社会的位置しか得られない」という奇妙な現象が、起こっているとすれば、それを説明するために、資本を運用するための資本という二重の資本概念を作り出す必要が出てくる。しかし、より単純な説明ができるのに、わざわざ「資本を運用するための資本」というより複雑な概念を作り出すことは、不必要だ。

ゆえに、このような実体化と無用な理論の複雑化を避けるためにも、「搾取モデル」は放棄されねばならない。

## 参考文献

- Bourdieu, P. 1977 *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press
- \_\_\_\_\_. 1980 *Le sens pratique*. Paris: Les Edition de Minuit (『実践感覚1・2』今村仁司他訳、みすず書房、一九八八～九一年)
- Calhoun, C. et al. 1993 *Bourdieu*. Chicago. Chicago University Press
- Harker, R. et al. 1990 *An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu*. New York: St. Martin's Press (『ブルデュー入門』滝本往人他訳、昭和堂、一九九三年)
- 小原一馬 1997 「ブルデュー資本概念の「秘密」と「隠蔽」」『ソシオロジ』130 掲載予定
- Marx, K. [1844] 1932 *Ökonomische-Philosophische Manuskripte aus dem Jahre in Karl Marx-Friedrich Engels historisch-kritische Gesamtausgabe 1-3*. Berlin: Marx-Engels Verlag (『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波文庫、一九六四年)